

<紙面直言>

“グローバル”な紙面を一「世界」と「地方」をどう結合

ユーラシア大陸に激動が続いている。ウクライナの独立に端を発するソ連邦の崩壊と独立国家共同体の創設、ゴルビーの退陣、EC連合を目指す西欧の壮大な実験、南北朝鮮の劇的な和解—歴史のダイナミズムに息をのむ思いだ。

スラブ3国の動きにはクーデター的な面もあり、今後の問題を残しているが、それはさておき、私がウクライナの動きに特に関心をもつのは、かつてソ連の自治体と交流したいとの長洲知事の意を受けて訪ソし、各地を回った結果、ウクライナのオデッサ州を適当な相手として進言した経過があるからだ。しかしウクライナはもはやソ連ではないし、隣国でもなくなった。神奈川との関係はどうなるのか。そもそも日本との関係はどうなるのか。

そんなことを考えていたとき、日ソ関係に尽くした老外交官の叙勲祝賀会に招かれた。旧ソ連大使館から公使以下数人が出席しており、みな旧知の人だったので率直に見解を聞いてみた。「ウクライナは重要な国になる。神奈川県とオデッサ州の関係は大切だ。ぜひ友好関係を続けてほしい」「ウクライナは隣国と多くの領土問題を抱えており、完全独立は難しい。強行すれば戦争になる。ロシアとの協調がカギだ。地理的にみて西欧志向が強くなるだろう」。ニュアンスの違いが気になるが、近く帰国してウクライナ政府とも協議してくるといふBさんと再会を約して別れた。

KSPという小さな窓口にも激動する世界の鼓動が聞こえてくる。しかも地方同士の交流がますます重要になっていることを感じる。最近も米ソ中韓台豪から来客が相次いだ。懇談を通じて地域間の経済交流が予想以上に広がっていることが分かった。とくに中韓の交流が活発だ。環黄海経済圏はすでに動き出している。11月に韓国・京畿道で聞かれた東アジア経済サミットに参加できなかった中国・遼寧省は、大変残念がっていた。

本紙はこれまでも国際関係や民際外交に敏感で、よくフォローしているが、現実の動きが急ピッチなので、なかなか追い切れないのが実情である。とくに地方レベルの動きは全国紙でもキャッチできていない。その意味で、本紙の今後の大きな使命の一つは、グローバリズムとローカリズムをどう結びつけるか、ということではないか。最近“グローカリズム”という合成語が使われているが、これからの新しい世界秩序を考える上でグローバリズムとローカリズムはともに不可欠のキーワードになっていく。しかも、この二つのキーワードを結びつける重要な接点に、この神奈川は位置しているのではないか。

神奈川新聞は、まさにこの神奈川において“グローバル”な新聞になり、ジャーナリズムにおけるグローカリズムの旗手になってほしいのである。そのためにも日本と世界におけるローカルな動きを、たえずグローバルな視野からフォローアップできるアンテナの整備と、感度の向上をはかっていくべきであろう。